

インド留学記

その4

はじめてのインド 国内旅行(2)



岩島 助教 愛知学院大学

ジャイナ教出家僧の生活

ジャンブーヴィジャヤ師は、五十前後の優しそうな、やぎ髭のおじさんだった。ジャイナ教の坊さんは、頭髪や髭をそらず、年に二回だけ

かな。日本の坊さんみたいに、結婚してしまうと、なかなかこうはいかないだろうな。やはり、坊さんは、「出家じやなくつちや」などと思つた。これは、のちに、チベットの坊さんに会つたときにも感じたことである。

二晩、信者用の宿泊施設（ダルマシャーラー）に泊めてもらつて、ジャイナ教のことをいろいろ教えてもらつた。ジャイナ教のことになると、ジャンブーヴィジャヤ師は、歴史、教義、修行、生活等にわたつて、本当に熱っぽく語ってくれ世俗の塵にまみれない分、子供っぽさを残すの

た。

師の一日は、四時起床に始まる。起きるとすぐ着物に虫などついていないか払つてみる（これは、誤つて、着物についた虫を殺したりしないため）。その後、一時間、崇拜と瞑想。八時は、托鉢に出て、朝食。肉・魚・卵はもちろんのこと、じやがいも等の土の下からとれる野菜も食べない。じやがいも等も食べないのは、次の二つの理由によるのだそうだ。（一）じやがいも等は、切つて土に埋めておくと、また生えてくる。これは、ジャイナ教の世界観の中では、靈魂が二つ以上ある植物ということになる。一方、地面の上に生えている通常の植物は、切つたらもう生えてくることはない。これは、靈魂が一つしかない植物である。従つて、靈魂が二つ以上ある植物を食べるよりは、靈魂が一つしかない植物を食べるほうが、まだ罪が少ない。

(二) 土の中から取れる植物を掘り出す際、誤

つて、土の中に住む虫を殺すという罪を犯す可能性がある。このような可能性は、避けるべきである。つまり、不殺生の日常的実践なのである。

十二時頃昼食。昼食後、ジャイナ教理の勉学と訪れる信者へのお説教。夕方には、また、一時間、崇拜と瞑想し、一日の反省を行う。日没後は、水はおろか薬も飲まない。なぜなら、暗闇のなかでものを口にすると、誤つて虫等を殺すという罪を犯すことがあるからである。

また、水を飲むときにも、水中の小虫を誤つて飲み込んだりしないように、水は濾過して飲む。外出して道を歩くときは、蟻などを踏みつけたりしないように、道を掃きながら歩き、また、空中の虫を吸い込んだりしないように絶えずマスクをかけて歩く。当然、蚊や蠅を殺したりするようなこともない。師は、蚊がよつてくると、払子で優雅に払いのけていた。とにかく

このように、不殺生という原則が日常生活のなかに貫徹しているのである。

さらに無所有の原則もまた、徹底している。無所有の原則を徹底させていけば、財産から手回り品は言うに及ばず、文字通りの裸一貫にならざるをえないはずである。ジャンブーヴィジヤヤ師は、衣服をまとうことを許容する白衣派なので、一枚だけ衣服をまとつていたが（夏でも冬でも一枚だけ）、衣服をまとすることを認めない派（空衣派）では、本当に一糸まとわぬ姿で生活しているのである。日本で空衣派の話を聞いてはいたが、なんとなく、隠すべきところだけは隠しているのだろうと思っていた。だから、南インドの空衣派の坊さんの写真を見た時は、ちょっとショックだった（なお、空衣派の尼さんはいないのだろうか、などと不謹慎なことは考えないこと）。

このように個々の事象を取り上げると、中に

は滑稽な気持ちがするものもないではないが、不殺生なら不殺生という思想、無所有なら無所有という思想が、ジャイナ教の出家僧たちのかで、日常生活のすみずみまで貫徹しているという思想の徹底性、これは日本の風土のなかでは、とても見られないスゴイものだとしみじみ思つたのであつた。

ジャンブーヴィジャヤ氏との対話

一日目、二日目と、ジャイナ教一般についての講義を受けた。そして二日目も終わるころ、念願の餓死について尋ねてみた。「ジャイナ教では餓死を認めていると聞いていますが、どんな人が餓死するのですか」と。ジャンブーヴィジヤヤ師は答えた。「あれはね、病気や年でどうしようもない人がするんですよ。そう宗教的な意味はないのです」。「ええ、そんな馬鹿な思想的帰結として自己の存在を否定し自覚的に断

「食して餓死するんじやないの?」。私の幻想は、最初から音をたてて崩れていた。

そこで次に、戦争について尋ねた。ただし、

戦争一般について尋ねても建前だけの答えしか返つてこないだろうと思い、インドと直接関わる戦争、すなわち中国とインドの国境紛争、インドとパキスタンの紛争について、どう思うか聞いてみた。すると、師は次のように答えた。

「例えば、家に泥棒が入つて来たとしてみよう。そして、泥棒が妻を犯し、子供を傷つけようとしたとする。そのとき、家の主人たる夫のとる道はいかなるものであろうか。妻を守り、子を守るのが夫の務めであろう。その際、妻子を守るために泥棒を傷つけ、殺すことがあつても、それは仕方のないことである。インドの他国との戦いは、これと同じである。中国からインドを守るため、パキスタンからインドを守るための戦いなのだ。國を守るために誤つて人をあや

めることがあつても、それはいたしかたのないことではないか」。いわゆる、防衛戸締まり論である。

「なんだ、これは。あの日常生活のすみずみまで貫徹していた、不殺生の思想はどこに消えちまつたんだ」。私の頭は混乱の極みである。

「（ええい、こうなりやなんでも聞いちやうぞ）カースト制度、なかでも特に、指定カースト（不可触民制）についてどう思われますか」。師は、答える。「あれは、政治的な仏教の徒だ（不可触民の多くはインド独立後、平等を求めてヒンドゥー教から仏教に大量改宗した）。指定カーストということで、議会のなかでは自分たちのための保留議席を確保し、また教育面では優先的に奨学金をもらっている。これは、逆差別を生み出すことになつてゐる。職業に応じてカーストが異なつてゐるということは、私は原則的にはいいことだと思う」。ここで、私の頭は完全にブ

ツツンになつてしまつた。話を打ち切つて、寝ることにした。

ジャイナ教の宗教的な思想（例えば不殺生）と現実の政治的・社会的問題への対応（例えば防衛戸締まり論）との大きなギャップ。それを、ギャップだとも感じないジャンブーヴィジャヤ師の意識構造。これをどう理解したらいいのか。夜、寝床で考えた。

いまだに良く理解できないのだが、とりあえず次のように考えた。「仏教でも同じことだが、ジャイナ教徒は輪廻からの解脱を目的としている。そしてそのためには、出家が不可欠だと考

えていた。だが解脱という世俗的世界からの超越を望むあまり、我々が通常生きている世俗的な社会生活にたいする理解なり理論が軽視される傾向にある。そのため『神のものは神のものと、王のものは王のもとに』ではないけれど、

社会的・政治的問題に関しては、世俗の論理に

盲従するという結果になつてしまふのではないだろうか。だが出家は別にして、普通の人々はこの社会的・政治的な世俗的世界で苦しんでいるのだ。出家者には、そこがよく分かつていなかいのではないか。このように「坊さんはやつぱり出家でなくつちや」という、昨日思ったことはかなり逆の感想を抱くことになつてしまつたのである。

ともかくこのことを契機として、翌朝日覚めたときには、「ジャイナ教の研究を続けよう」なんて殊勝な気持ちは、跡かたもなく消え去つていたのであつた。

ナショナリストと個人主義

メッサナをあとにし、ジャイプールで日本へのおみやげの貴石レモン・トバーズを買い求め、クルクシエートラで学会を見学したのち、デリーに戻る。途中、汽車のなかで五十がらみのお



じさんには話しかけられる。なんだかんだ話しているうちに、「お前は、中国が好きか」と尋ねられる。漢文なんかはわりと好きなほうだったのでは、「まあ、好きなほうです」と答える。するとおじさんは言う。「日本は仏教国ではないか。仏教では不殺生を説いているだろう。なのに、暴力革命を認める共産主義の国が好きだなんておかしいじゃないか」と。（むむ、なんてすごい論

いく。こうなるとインド人の独演会で、こちらはフンファンと聞いているより仕方がなくなつてくる。論理にすぐ空虚さを感じてしまう日本的心性と、空虚な論理にでも見事な言葉の装飾をほどこしてしまうインド的心性の差が、歴然としてくるのだ。とにかくこちらは、論理を延々と展開する根気に欠けている。「ああ、またインド人に負けてしまった」とションボリ。

理だ)とと思いながら、とりあえず反論する。「インドはソ連と友好関係にありますよね。ソ連も暴力革命で成立した国じやありませんか。不殺生を認めるヒンドゥー教の国インドが、ソ連と仲良くしているのは、変じやないんですか」と。するとおじさんは、「インドやソ連は社会主義国で、共産主義国の中国とは違うんだ」という論理を開拓しはじめる。そしてさらに、「国を守るために、インドが核を保有することは正当なんだ」なんて話にまで、彼の論議は自己展開していく。

「インド人はナショナリストだが、われわれは、なんと個人主義であることか」。これが、話題では、茂木氏(現在信州大学助教授)と一緒に、ヒッピー宿のドミトリ(相部屋)に泊まる。オーストラリアの女性、日本人の学生、茂木氏に私の四人で一部屋である。オーストラリアの女性は、国では教師だったとかだが、インドでは完全なヒッピーで、時折ハッシュシング(大麻)を吸っている。ハッシュシングの煙たなびくなか、彼女とインド人について話ををする。

の結論であつた。ジャンブーヴィジャヤ師の場合も、また、汽車のなかで会つたおじさんの場合でもそうだが、五、六十代のインド人はとても国家のことを大事に思つてゐるようだ。国家的利益（例えば防衛戸締り主義論や中国・パキスタンへの敵意やインドの核保有擁護等）のほうが、宗教的あるいは個人的な利益や理念（例えれば不殺生等）に優先してしまふのである。インドの共産主義でも、階級的利益より国家的利益のほうを優先させ、「原爆保持は国家防衛のために必要なものだ」という見解をもつてゐるのだそうだ。だがわれわれの場合には、「戦争が起きたらどうしますか」というアンケートにたいして、ついつい「他の国に逃げ出します」（もちろんその時には逃げ出せるような状況にはないだろうが）と答えてしまふような、そんな世代なのである。

これは結局、一つには、近代化の進行程度の

違いに原因があり、一つには国をとりまく国際環境の違いに原因があるのでろう。當時、独立後二十年。インド的貧困、多言語・多民族国家の統一、教育の普及等の内政問題や、中印、印パ紛争などの外交問題など、様々な問題をかかえながら近代国家建設に励んできた国インドの人々と、すでに国家建設を終え、充分な経済的豊かさを獲得してしまつた日本やオーストラリアの人とでは、国家にたいする思い入れが違うのは当然のことなのであろう（ただし後で分かったことだが、これがインド人でも私と同世代の人たちになると、われわれに近くなつてくるのではあるが）。日本でも、西欧列強の植民地になりかねない状況のなかで、近代国家の建設に取り組んだ明治期の人々のなかには、きっと今のインド人のような人が多かつたのだろうと思う。

でも私はやつぱり、汽車のなかであつたおじ

さんの元気さより、デリーのドミニトリーで会つたオーストラリアのヒッピーのものうげな優しさのほうが好きだ。

犯す文化と犯される文化

デリーのドミニトリー（相部屋）であつたオーストラリアの女性をはじめ、私が旅行中にイン

ドで出会つたヒッピーには、新大陸（アメリカ、



カナダ、オーストラリア）の子多かつた。本国で一年かせいで、二、三年、物価の安いインド、ネパール、東南アジア等を旅行してまわっているとのことで、インドには本国の物質文明にはない神秘的な精神性を求めてやってきたという人が多かつたのだ。

日本でも、高度成長期が終わり、オイル・ショックなどで日本経済の先行き不安などがとりざたされ、「物の時代から心の時代へ」なんてことが言われていた。それにともなつてインドのイメージも、高度成長期の「貧しい国インド」から「神秘の国インド」へと移り変わりつつあつた時期であつた。日本人のなかにも、神秘的な精神性を求めてインドにやつてくる若者が数多くいた。その意味では、新大陸の人たちが印度にやつて来るのはよく理解できる。でも、たまたまのかもしれないけれど、どうして私の出会つたヒッピーには新大陸の人が多いのだ

ろう。ふと、こう思った。そして、次のようなとりとめもないことを考えた。

私A・「新大陸の国々は移民でできた国だから、せいぜい二、三百年の歴史しかないよね。でもヨーロッパの国々には、ずっと長い歴史と文化的伝統があるからね。その歴史的・文化的重みの違いがあるせいじやないかな。その意味では、日本にも、インドや中国ほどではないにしろ、長い歴史的・文化的伝統があるんだから、それは誇りに思つていいんじやないかな」私B・「でもインドや中国やヨーロッパの文化は、近隣地域をはじめ世界各地に伝わつていつたけれど、日本の文化はそうでもないから、どう自慢もできないんじやないの?」私A・「確かに、中華料理つてすごいよね。世界中どこに行つても中華料理屋があるんだから。日本料理はそういうかないよね」私B・「このあいだ、中華料理屋にいつたんだ。そしたらね、店の真ん中の柱

に『華僑の足跡、天下を遍く照らす』なんて書いてあつたよ。すごいよね」私B・「日本人も山田長政のころ、東南アジアに日本人街を作つたりとか、明治以降も、アメリカやブラジルに移民した時期があつたよね。中国人やインド人を見ていると、移民してもたいてい中国人街とかインド人街とか作つて、三世になつても四世になつても中国語やインド語も喋つていて、中華料理やインド食を食べてるとこあるじやない。中国人、あるいはインド人としてのアイデンティティが強固だつていうか。あれはすごいよね」私A・「日本人だつたらどうかな」私B・「二世の場合どうか分からなければ、日系三世や四世がアメリカやブラジルで相変わらず日本語を喋つていて、たくわんでお茶漬けを食つてるつて場面は、ちょっと想像しにくいよね」私A・「なにが違うんだろうね?」私B・「ちょっと卑猥な言い方だけどね。文化にさ、他の文

化を犯してしまった男性的な文化と他の文化に犯されたそれを受容する女性的な文化ってのがあるんじゃないのかな」私A・「ということは中国やインドや西欧の文化は犯す文化で、日本とか東南アジアの文化は犯される文化ってわけ？」

私B・「そういうことだけだ」私A・「日本が犯される文化ね。ちょっとゾッとしたしないね。でも、

そんなネーミング（命名）をしたところで、結局、違いは分からぬなあ」……。こんな風に独断と偏見に満ち、飛躍だらけのモノローグ（独り言）が続いていくのであつた。

帰途の旅

デリーからの帰りマトウラー、アグラ、サンチーに立ち寄る。

マトウラーは、インド仏教美術史のなかでマトウラー様式とかいうものに分類されている仏像とヒンドゥー教の神クリシュナ信仰の地で有



名なところだ。駅でまず、荷物を一時預かりに預ける。リュックで鍵がかからないので、「中身が抜き取られて紛失しても、一切文句は言いません」という一札を入れなければ預かってもらえない。「どうせ下着くらいしかはいっていないのだから」と思い、一札入れる。その一札を取った係員が私の腕時計を見て、「売ってくれないか」と言う。こういうことは旅行中よくあることなので、こちらも「これは叔父さんの贈り物で記念の品だから、残念だけど」と、さも残念そうに答える。そうすれば、それ以上せがまれることはないとおもふ。

駅からサイクル・リキシヤ（人力車ならぬ自転車力車）に乗り、博物館へ向かう。だが月曜日だったが金曜日だったかで、博物館は休館日。マトウラー仏見学ははやばやとあきらめ、クリシュナ神信仰の地に向かうことにする。

日本の浄土真宗では、南無阿弥陀仏（阿弥陀仏に帰依します）と唱えれば、極楽浄土に生まれて、救われるとされているが、インドにもこれとよく似た信仰がある。クリシュナという神

様に帰依すれば、クリシュナとともに永遠に天国で楽しく過ごせるというのだ。このクリシュナという神様が地上の民を救うために地上に降誕なさつたのが、このマトウラーというわけなのである。

クリシュナ降誕の地のまわりには、多くの大寺院が建ちならんでいる。それも真新しいものばかりだ。インドの民の貧しさとこの真新しい大寺院の対比はどうだ。これらの大寺院を建てて

るのに、一体どれだけのお金がかかったことだろう。もちろん「現実が苦しいからこそ、宗教に救いを求める」ということがあるわけだから、「寺院にかけるお金があつたら貧乏人にまわせ」なんてことを言うつもりはさらさらないが、「それにしても、もつとなんとかならないのだろうか」とは思ってしまう。しかし、それ以上のこととは残念ながら考えられない。

その後アグラで、タージマハールとかいう、巨大で幾何学的な美しさを備えたイスラームの後の墓を見た後、サンチーに向かう。サンチーは、仏陀の骨を納めた仏舍利で有名なところで、小高い丘の上に仏舍利が三つ建ちならんでいた。また仏舍利の門に彫られた彫刻は、インド美術史上とても価値のあるもので、その研究に一生をかける学者もいるのだとしがれど、その当時の私には、所詮猫に小判であった私は、半月にわたる一人旅でいいかげんくたびれてい

た。サンチーにあるスリランカの仏教協会かな
んかの建てたお寺の宿舎で安く泊まれ、たらふ
く飯が食え、仏舎利のある小高い丘の上でのん
びりと昼寝をするのが、たまらない幸せだった。
しかし、それも長くは続かなかつた。手持ちの
金がついに十ルピー（三百円）をきつてしまつ
たのだ。しようがなく汽車に乗り、プーナへ向
かう。

ところが、「一等車は昼の間は予約なしで乗れ
るが、夜になると寝台に変わるので、予約がい
るのだ」ということをつい忘れていた。夜にな
つたら車掌にコンパートメント（車室）から追
い出されかけ、あわや、最寄りの駅で降ろされ
るところだつた。なにしろ残金が十ルピーをき
つていたので、これには困つた。ところが運よ
く、というかなんというか、たまたまぐり込
んでいた一等のコンパートメントに、東京オリ
ンピックのときにホッケーの選手で日本に来た

ことがあるという、ターバンを巻き髪をはやし
たシーケ教徒のおじさんがいたのである。日本
に対しても好意的な人で、私が日本人だと
分かると、車掌やコンパートメントの他のお
客さんと交渉してくれて、ともかくベッドとは
いかないまでも、コンパートメントの床に寝て
いることになつたのである（この人は途中で
降りたので、結局はこの汽車の旅の半分くらい
はベッドで寝られたのだが）。こうして、とにも
かくにもプーナへと無事戻つてきただのであつ
た。

プーナ発プーナ着の西北インド半月の旅は、
こうして終わつた。汽車の周遊券三百三ルピー、
おみやげの貴石レモン・トパーズ代二百五十ル
ピーを含むホテル代等の諸費約五百ルピー、合
計八百三ルピー（当時二万五千円程度）の旅で
あつた。